
国 際 健 康 開 発 *I H D*

特定非営利活動法人(NPO)会報 15 号 2015年7月

平成 27 年度になって一今年度の計画一

牛島廣治

日本大学医学部病態病理学系

微生物学分野

ushijima-hiroshi@jcom.home.ne.jp

特定非営利活動法人国際健康開発の発足が 2007 年 12 月になりますので、7 年が過ぎたことになります。診断薬の開発と普及を目的として、また国内外の研究者の支援として発足し、それぞれの年に応じた事業を行ってきました。今後も必要な支援事業を行っていききたいと思います。

私たちと一緒に研究を行っているアジアからの大学院生は、少しずつ代わってきています。博士課程の Aksara Thongprachum さん、Dinh Nyguen Tran さん、修士課程の Angela Fitriani Kalesaran さんが卒業しました。その代り Aksara Thongprachum さんがポスドクとして残ってくれます。また Nusrat Khandoker さんが修士として入学されました。いずれもアジアからの留学です。ウイルス性下痢症を中心とした感染症の研究をしてくれます。

平成 27 年度の事業計画として、診断薬の開発事業、第 2 回国際アジア小児感染症研究会が大きくあります。また留学生の活動支援もあります。財政面では、平成 26 年度は幸いにも予定に反して寄付が続きました。しかし国の制度から寄付が得にくい状態と

なっております。今後、継続に難しさがありますが、それにめげずにより成果をあげたいと思います。

ご協力、ご支援ください。

日本からアメリカに渡り働いている女性

Hitosugi Sadae

〈アメリカで妊娠、出産〉

2005 年に第一子を出産した時、「自分も兄弟がいて楽しかったし、いつかこの子にも弟か妹を作ってあげたいなあ」となんとなくは思っていたのですが、私はその後幸いにも 4 人の子宝に恵まれ、我が家は毎日動物園のような賑やかさです。正直、まさかここまで家族が増えると考えていませんでした。それで自分でも驚いている反面、今の少子化問題を考えると子沢山もそう悪いことではないのかもと思います。2008 年に第二子を出産後に仕事を探し始め、2009 年からは子どもを保育園に預けながら、日中は Research Technician としてラボで働いています。今回牛島先生より原稿依頼をいただき、4 人の子の出産の経験、そして日本とアメリカでの出産の違いを紹介させていただくこととなりました。

東京大学で博士号を所得した主人がアトランタの Emory University で博士研究員として働くことになり、家族でアメリカに行

く準備をしている矢先、私はお腹に第二子を授かったことがわかりました。その後、上の子を連れて渡米した際には妊娠 5 ヶ月でした。引越し作業に追われつつもまずは Emory University の産科に行き、最初の妊婦検診でまず驚いたのは、「日本で妊婦検診のたびに行われる超音波診断がアメリカでは妊娠中に通常 1、2 回しか行われない」ということでした。日本では病院に行くたびにお腹の中の赤ん坊を超音波で見ることができて、ドクターに「今日も赤ちゃん良く動いて元気そうですねー」とか皆さん言われたりしますよね。最近では日本でも夫婦で検診に行く人たちも増えたこともあって、私が日本で妊娠中の時も時間があるときは主人も一緒に検診に来てもらい、超音波で映し出されるお腹の赤ん坊を見て盛り上がったのを覚えています。特に私が第一子を妊娠中の時は、妊娠発覚後すぐにかかなりの量の出血があり救急車で病院に運ばれたので（赤ちゃんがお腹から出てしまいそうになる「切迫流産」でした）、毎回検診のたびに「今日は元気にしているだろうか」とドキドキしながら病院に行ったものでした。

所変わってアメリカでの定期妊婦検診では超音波診断は含まれていないので、赤ん坊が今どんな状態なのか、どんな感じなのかは見ることはできません。通常の妊婦検診では血圧、採尿、お腹の大きさ、そして問診などで終わりです。ただ、通常の定期検診で超音波検査が無い代わりに ultrasound check up というのがあり、そのために通常の妊婦検診とは別に日程が組まれます。その際には超音波検査専門の技師が、赤ん坊のサイズ、すべての臓器が正常に動いているか、また奇形の有無などに

ついて 30～40 分ほどかけて丹念に調べてくれます。この検査がだいたい妊娠 5 ヶ月前後で一回、後は 9 ヶ月頃にフォローアップとしてもう一回行われるのが普通です。通常は妊娠中 2 回ほどですが、私が第四子を妊娠中には低置胎盤（胎盤が子宮口のすぐそばにあり、場合によっては分娩中に出血多量になるため帝王切開が必要になることもある）の問題があったため、合計 5 回ほど ultrasound check up を行いました。胎児や胎盤の位置、大きさなどをなんども測り、そのデータをもとに医師が細かく診断してくれたので、妊婦としてはとても安心することができました。

また、日本の産科では予約して検診に行っても 1 時間待たされることはしょっちゅうで、お腹の大きい妊婦さんたちで産科の待合室でごった返していたのをよく覚えています。アメリカでの妊婦検診も同じく予約制ですが、15 分以上待たされたことは滅多にありませんでした。これは産科だけでなくすべての科においてですが、アメリカでは予約した人しかその日に検診することができないシステムだからでしょうか。日本では何か異常があるとその日に飛び込みで受診できるところが殆どですが、アメリカでは突然風邪を引いて具合が悪くなったとしても、運良くその日に空きがあるのを祈りつつ電話で予約を取るか、emergency（救急外来／保険付きでも通常 300 ドルほど）に行くしかないシステムになっています。「患者はすべて予約制。」これにより飛び込みの外来患者が来ないので、ドクターたちはある程度余裕を持って患者に接することができ、日本の産科医のドクターたちの忙しさを考えるとこれはとても大きな違

いだと感じました。

私は第三、四子を妊娠中はこちらで働いていたのですが、ワーキングママならぬ「ワーキング妊婦」も日本とはずいぶん周りの対応がちがうな、と思ったものです。まず日本の場合ですと産休は9ヶ月くらいから取る方が多いようですが、こちらの場合は異常がなければほとんどの妊婦さんが予定日ギリギリまで働きます。特に印象的だったのは私のラボメイトだった小児科医の女性がwestern blottingの実験中に暗室で破水し、ラボメイトたちがオロオロ心配していると「大丈夫よー、そんなすぐには産まれないから。これから友達が私を迎えに来るから、悪いけどこの実験の続きをお願いしても良いかしら？」と言いついて、悠々と去って行きました。日本だとちょっとあり得ない状況ですが、私自身もこちらに来たらこちらのスタイルということで、出産予定日近くまでラボで実験することにしていました。臨月はお腹が重いので思うように体は動いていませんでしたが、家にいるよりもかえって運動不足にならずによかった気がします。ただ東京で同じことができるかと考えるとちょっと疑問です。というのも日本の都市部ですと妊娠中も満員電車に乗って通勤しなければならないので妊婦さんたちは本当に大変だからです。アメリカの場合ニューヨークなどの大都市以外はそんなに人口過密ではないので、お腹の大きな妊婦さんも日本に比べると皆ゆったり通勤しているように思います。実際私も日本で第一子を妊娠中は、仕事よりも通勤が大変で苦痛でした。また周りの対応ですが、日本では仕事場では妊婦さんが周りに気を使ってもらうこともあります、意

外にも私がこちらで妊娠中に働いていた時は仕事の時間、量や質に妊婦ということで変わることは何一つありませんでした。日本だと会社によっては妊婦さんが時間をずらして出勤できたりしますが、こちらではそのようなものはありません。これは一見大変なようですが、「男でも女でも、妊婦でもそうじゃなくても、おなじポジションであるならば仕事量はすべて平等」ということの表れで、角度を変えて見ればこの方がフェアなのかな、とも思いました。この点も日本とはかなり違うと感じました。

そしていざ出産。第二子、三子と予定日になっても出てくる様子はなく、私のお腹が心地いいのかどうかは不明でしたがあまり長いことお腹の中に入れておくわけにも行かないようで、ドクターの提案によりinduce labor（計画出産）することになりました。出産の際に「無痛分娩を希望しますか？」と聞かれ、もちろん「イエス！」と即答した私。実は日本での第一子の出産時は32時間の長時間で、もちろん無痛分娩などできず産後は心身ともにボロボロ、産後の回復もとても時間がかかり、まるで川を登った後の鮭のようになった経験があったので、アメリカでは絶対に無痛分娩したいと思っていました。日本では帝王切開以外は保険適用外なのと文化的なものもあって、ほとんどの妊婦さんが麻酔なしの普通分娩で出産されますが、こちらでは9割の妊婦さんが無痛分娩で、もちろんしっかり保険適用です。第二子が無痛分娩で出産した時に「こんなにも無痛分娩がすばらしいなんて」とすっかり気を良くした私は、第三子の時も無痛分娩を希望したのですが、なんと出産の最後の1時間、一番陣痛が大

変な時に麻酔が切れてしまい、「え？なんで、今麻酔が切れるの！？」と思いつつ、悶絶しながら「お願いですから麻酔を追加してください」と、とぎれとぎれの英語で麻酔医に懇願しました。その後すぐに追加で麻酔を入れてもらったので痛みは遠のき、無事に元気な赤ちゃんを出産できたのですが、追加の量が多かったのか産後に震えがきて顔は真っ青、そして嘔吐と大変でした。これは病院や麻酔医にもよるのですが、これからアメリカや海外で出産される方にはこのようなアクシデントに見舞われないためにも、麻酔の量、時間など、出産に関して自分が疑問に思うことはなんでも、前もってしつこい程にナースやドクターに質問しておくのが良いと思います。つたない英語でも構いませんので、通じるまで、自分が納得できるまで、諦めずに聞いてほしいと思います。特に、健康な妊婦の場合は「決まって」レジデントが診断や処置をするので、さらに注意が必要です。私の場合は最初に打った麻酔が産前に切れてしまわなければこのようなことにはならなかったもので、もっとどのように自分の出産が進んでいくのかきちんと質問しておけばよかった、三人目だからきっと大丈夫だろうと少々出産を甘く見ていた、と反省しました。出産の際に日本では第3者に臍帯血を寄付できる場合も多いのですが、私が経験した Emory University では約1,000ドルで「将来自分や家族が白血病になった時のために、stem cell を保存できるシステムがある」と言われました。私は患者さんや研究施設に寄付するのだったら良いけれど、お金を払って保存しておくのは気が進まなかったものでそれは辞めておきました。ですができ

ることならそのままただ捨ててしまう臍帯血を、患者さんに寄付したかったと思っています。

また産後ですが、基本的にはアメリカでの産休は12週間で終わりです。会社や所属する機関にもよりますが、その間のお給料は「自分の有給」が削られて払われていくので、早い人では産後6~8週間くらいには仕事に戻ります。またアメリカでは出産を理由に解雇することは法律で厳しく禁じられており、産後も同じポジションで復帰することが約束されています。3ヶ月ブランクがあっても産前と全く同じ仕事環境が保証されていて、もし出産を理由に解雇された場合には裁判を起せば100%勝つことができます。10年前私が日本で第一子を妊娠して仕事場に報告した時は年更新の職員だったために仕事を辞めざるおえない状況を伝えられ、まだ大学院生だった主人と赤ん坊を抱えることになり途方に暮れていたのを覚えています。アメリカではアルバイトでもパートでも正社員でも任期職員でも、妊娠や出産を理由に仕事を失うことはまずありません。(余談ですがその後途方に暮れていた私をみて、友人が牛島先生を紹介してくださり先生の研究室でアメリカに渡るまでの期間お仕事をさせていただきましたので、牛島先生は我が家の恩人と言っても過言ではないでしょう)

さらに違う点としてアメリカでは妊娠と出産に関して国からの補助金、手当などは一切ありません。日本では出産の補助金や産休手当もあり、正規社員の方は産後1年くらい産休と育休を合わせて休める場合がほとんどなので、その点はずいぶん違うなと思いました。私も第三子のときは生後3

ヶ月の赤ん坊を保育園に入れ、「こんなまだ首もぐにやぐにやの子を預けてまで働かなくてはならないなんて、、、」と最初はかなり罪悪感がありましたが、周りを見るとこちらの女性たちはみんなそうやって仕事に復帰していて、ママをやりながらもきちんとプロフェッショナルとしてやっている。それを見て、子どもたちもみなちゃんと育っている。子どもを産んだから、増えたからといって自分の時間を子どもたちに当てることが全てではなくて、私にもそういう選択肢があるのだ、と前向きに思うようになりました。

日本、アメリカとそれぞれいろいろあった妊娠と出産ですがおかげさまで子どもたちはみな無事に生まれ、元気に育っています。どちらの国も良い点と悪い点があり、どちらが良いかはひとそれぞれ感じ方が違うと思いました。こうやって海外に出て出産や育児をすることで、日本にいるときは気づかなかった「日本の良いところ」を改めて見つめ直すことができたのが、私にとって最も大きな収穫だったような気がしています。サポートしてくれた家族や友人、また応援していただいた先生たちのおかげで今の私たちがいます。そしてこうやって自由に海外に行き研究できるというのは平和で安全な証拠であり、それがこれからも続いていってくれるよう願っています。



写真1 生まれてすぐの赤ん坊。アメリカではヒーターの下で、裸で置かれている場合がほとんど。



写真2 産後二時間後、異常がなければ個室へ移動。退院までここで過ごす。アメリカでは通常産後48時間で退院。

大分の思い出

江下優樹

大分大学医学部客員研究員

マヒドン大学熱帯医学部

研究者として大学に勤務を始めて、ふと振り返ると既に43年が経過していた。その間、3回の大学移籍、2回の長期海外生活があった。そして、今年の3月に定年退職を

迎えた。数年前から、退職後のことを少しは考えていたが、忙しさもあって、実際にどのようなになるかはその時の状況次第と思うようになっていた。私は縁あって、22年前に住んでいた東京に戻ってきた。研究生生活のはじまりが東京からであったように、退職後の第2の人生のはじまりも同じ東京からとなった。息子夫婦が東京に住んでいることから、老後のことを考えて、近くに住んでいた方がよいと思ったことも、東京に引っ越した理由の一つである。

22年前に東京を離れて以来、九州の久留米と大分に合計で約22年住んだことになる。東京にはないものを見つけては、満喫する楽しい日々であった。久留米では有明海の珍味を食べる機会が増えた9年間であった。そして、大分では週末になると温泉に入りに出かけて、温泉の魅力にどっぷりとつかった13年間であった。東京に戻ってきて、既に2ヶ月程が経過した。東京は知らない町では無かったが、22年前の東京では経験したことのないことに遭遇して戸惑ったりすることがある。しかし、九州にいたときのように、新しい東京を発見するのは楽しいことでもある。たとえば、銀行のATM機が駅の周辺に沢山設置されていたり、埼京線が品川まで繋がっていたり、バスが頻繁にくるなど、東京には東京の良さがあるので、これからはその良さを探すことを楽しもうと思っている。

大分にいたときの、大学院生のL君は、博士号を無事に取得した。そして、T大のポスドクとして研究を続けるために、同じく関東に上京している。研究者としての最初の試練となるが、新しい分野で研究を続けて、母国に戻っても研究者として研究を

続けていただきたいと願っている。大分でやり残した研究があるので、時々大分に出かけて、L君と私は実験を行う事になっている。L君とのつきあいは、これからまだ続きそうである。

簀木蓬生の作品「天に星 地に花」と現在

牛島廣治

天に星 地に花 人に慈愛 の掛軸から「天に星 地に花」というタイトルの本が2014年8月10日に発行された簀木蓬生の作品である。以前、私は同氏による「水神」について紹介した。今回の本は、歴史的にはそれに続く1,700年後半の流れである。同じ久留米藩の事ではあるが「水神」は現在、佐賀に属する地であるのに対し、「天に星 地に花」は福岡である。本のあらすじは、<http://book.asahi.com/reviews/column/2014082400019.html>（朝日新聞のコラム）を読んでほしい。紹介のタイトルには「社会を変える小さな力の結集」としてあり、農民が一致団結して、一揆と言う形で久留米藩主に対抗する。しかし主人公は高松庄十郎[高松凌水(りょうすい)]という漢方医である。彼の目から見た、農民が主体の、下からの社会矛盾を追及した物である。彼自身は庄屋の生まれであるが、次男であるため、また疱瘡に罹って九死に一生を得たため、医業を志した。懐かしい故郷の佐賀弁が出てくる。当時のこの地方の暮らし、食物、場所、行事などが出てくる。私の仕事柄当時の治療法も読めて面白い。著者は恐らく、2015年の数年前からの

国内、国際的な政治の動きを感じながら書き、また読者はそれを感じながら読んだと思う。何か間違った方向に日本は向かっている、また世界も混とんとしている。昔のような一揆、現在ならクーデターは民主主義国家では正当化できないが個々がどのように対応すべきかが問われる。民意がより正しく政治に反映されるためである。平和があってこそその健康である。

あとがき

会報 15 号を皆様のお手元にお届け致し

ます。寄稿して下さいました皆様にお礼を申し上げます。

今年も既に半年が過ぎました。月日がたつのが早く感じられるのは、私が歳をとったからなのかと思う日々です。残る月日も、世の中で大きな災いが起こらない事を願っています。

本 会 報 は 、 ウ ェ ブ 上
(<http://square.umin.ac.jp/boshiken/>)
で公開されています。

本活動に御賛同くださっている皆様方には、引き続き御支援の程よろしくお願い致します。(YE)

